君が聞こえる～ハーモニー～

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が聞こえる～ハーモニー～

【Ｎコード】

Ｎ１４１５Ａ

【作者名】

ＡＫＩＲＡ

【あらすじ】

天川流星（あまかわりゅうせい）と言う、十七歳の少年がいた。家族とも仲が良くいい親友と呼べる仲間もいて、何事も無く高校生活を過ごしている。ある一つの秘密を除いては…。その流星がある人との出会いをきっかけに、世界で一番暖かくて優しい声に気付く物語。

第一話　変わらないで今…

天の川が輝く夜に、一筋の流れ星が流れた。
「りゅう！早く起きなさい。学校遅れるよ」
母ちゃんの甲高い声で今日も一日が始まった。
俺の名前は天川（あまかわ）　流星（りゅうせい）十七歳。この名前は、俺が生まれた七月七日、出産を待っている時に、父ちゃんが夜空を見上げると、一筋の流れ星が流れたらしい。
その数分後、生まれた俺を「流れ星に乗ってきた子供だ！！」と、父ちゃんが言い張り、この名前になったらしい…名前の由来はともかく、俺はこの名前が好きだ。名字の助けが合ってか響きがいい。制服に着替えて下に降りて行くと、父ちゃんと、一歳下の妹、結（この名前にも由来はあるが、それは置いておく。とにかく父ちゃんは『ロマンチスト』って事らしい）が朝御飯を食べ終わったところだった。
「つーか、もう時間ねぇ～じゃん！！もっと早く起こしてよ。牛乳だけでいいや」と、言ったら、「五回も呼んだよねぇ～？」と、母ちゃん。そして結と父ちゃんが、「うんうん」と言った。三人は、すごく仲が良く、何かと三対一になってる気がする。いつも朝はこんな感じですぎていく。
家を出て、電車に乗ると後ろからドーンと誰かがぶつかってきた。それと同時に「うぃ～す」、「おは」と二人が声を掛けてきた。俊と歩だった。俊はいつも明るくて、走り回ってて、食いしん坊。歩は、ロン毛が良く似合い、さわやかで、男でもホレそうになるぐらいの美形。
「相変わらず眠そうだなぁ～流」と俊がパンを片手に言う。俺は、「俊は相変わらず良く食べますねぇ～」と、呆れ口調で言い返してやった。歩を見てると、俺と俊を見てさわやかに微笑んでいた。歩とは、家も近くで、小さい頃からずっと一緒に育ってきた。俊も

小学校からだから似たようなもんだ。
俺には、こんな仲がいい二人にも、家族にすら言えない秘密があった。この時はまだこれで構わない、と言うより、その秘密を受け入れたつもりでいたのかもしれない。

第一話　変わらないで今…（後書き）

小説を読んでいただきありがとうございます。
これからの展開を面白く書いていきたいと思いますので、気楽な感じで読んでください。
出来れば、感想や評価を頂けると嬉しいです。

第二話　秘密

電車を降りて、俊と歩と、クラスのあの子が可愛いとか、あのアイドルがどうとか、たわいもない話をしながら学校へ向かっている。でも、俺はいつもうつむき加減で歩いている。いつからこんな風になったのかは、良く覚えていない。けど、親や先生に、「人と話す時は、相手の目を見なさい。」なんて、良く言われた記憶がある。それは、人見知りや、照れ屋、なんて簡単な理由なんかじゃない。皆はそう思っているかもしれないけれど、それはない。だって俺は、決してそんなキャラじゃない。

ホントの理由は…

相手の目を見ると、その人が今、何を考えているかが分かってしまうからだ。目を見ると、耳の奥で相手の声がする。しかも、微かな声じゃなくて、ハッキリ聞こえてしまうんだ。こんな事、誰かに言っても信じてもらえる訳がないから、ずっと秘密にしてきた。皆は、「人の心が分かったらいいのに」とか、「心の声が聞けたらなぁ」とか言うけど、全然良い事なんかない。初めは、誰かがホントに、話しているのかと思ったが、そうでない事に気付き、嬉しくもあり、好奇心を揺さぶられるような、不思議な感覚だった。俺は、この能力を使っていろんな人の心を覗いてやった。
授業中に先生が、「あいつ今日のブラは黒かぁ、いいねぇ」とか言っていたり…
交番のおまわりが、「暇だなぁ～事件でも起きねぇかなぁ」とか…
好きな女の子が、「流星君っていつ見てもカッコイイなぁ」とか…
でも、ありとあらゆる人の心を覗いている内に当然と言うべきか、聞きたくない声まで、聞こえてきてしまった。
相手の本音、表じゃなくて裏の部分が…

俺の話にすごく共感してくれている目の前の相手の目を見ると、鼻で笑う声が聞こえてきたり、本音と言うのは、時として残酷だった。俺は、俊や歩、父ちゃん、母ちゃん、結には一回も、ちゃんと目を見て喋った事はない。一時期人間不信になった事もあったが、この人達だけは信じたかった。でも俺は、信じたかったくせに皆の目を見て話せない…

やっぱり、何処か怖かったのかも知れない。

こうやって、俺は生きてきた。こんな事をボーッと考えてたら、「流どうした?」と、歩の優しい声がした。「何でもないよ。」と言うと、「どーせエロい事でも考えてたんだろ」と俊が笑いながら言う。「歩は優しいな、どっかの誰かさんと違って!!」と、皮肉たっぷりに返してやった。

俺は、三人でするこんなやりとりが、かなり好きだ。

みんなの、目の奥にある真実を知らない今だから…一つ溜め息がこぼれた。

第三話　恋愛なんて…

バカ話してる内に、学校に着いた。
ゴールデンウィークが、終わったばかりで、まだ、みんなお休み気分抜けてないようだ。俺もその一人だ。
「じゃぁまた後でな」と言い、俊が教室に向かって、ダッシュして行った。
俊とは別のクラスだけど、歩とは一緒だ。
「そうだ流！！今度の日曜日あいてる？」歩がいきなり、忘れてたとばかりに聞いてきた。
「なーんにも予定なし」
「じゃぁ合コン行かない？この間、知り合いの子が、どうしても合コンして欲しいって、頼まれちゃって」
「えー、だってその女の子達、みんな歩狙いじゃ～ん」
「そんな事ないって。ちゃんと、流をアピールするし、いいアシスタントするからお願い！！」
歩が、そこまで必死になってるのには、何か理由があるのかと思い、「分かった、行くよ」と言った。すると、歩はホッとした顔を見せた。
俺だって女の子は大好きだし、彼女も何人かいた。でも、すぐに冷めてしまう。俺にとって、恋愛なんて簡単すぎてつまんないもんだと思っていた。相手の目を見ちゃえば何を言って欲しいかとか、俺の事を好きかどうかだって、手に取るように分かっちゃう。そんな感じで、付き合っても飽きたら別れるの繰り返しで、俺はホントの『愛』ってもんを全く分からなかった。
「ちなみに、どんな子来るの？」
「みんな可愛いし、性格もいい子達だよ。まあ、年は俺達より三つ上で、二十歳だけどね」
「歩は、そんな年上と何処で知り合うんだよ。さすがだなあ」と言

うと、歩はサラッと、「たまたまだよ」なぁ～んてサラッと、カッコ良くかわされた。
毎日、何となく授業を受けて、何を考える訳でもなく過ごしている。十七歳がいい時期だと言われてるけど、ホントにそんな気がする。いよいよ合コンが数時間後に迫った朝、俺はちょっとそわそわしていた。そろそろ彼女が欲しくなってきた頃だから、自然と気合いが入る。黒のパンツ、柄シャツ、ジャケット、アクセサリーを幾つか選んで、髪型をセットした。
出掛けようと下に降りると、母ちゃんと結が飛び出してきた。
「お兄ちゃんデート？カッコつけちゃって」ニヤニヤしながら結が、叩いてきた。
「うるせぇ～なぁ、違うよ！！歩達と遊ぶだけだよ」と言うと、結が不満そうに「ふぅ～ん」と言った。
逃げように出て行こうとすると、母ちゃんが、「頑張りなよ！」と、ニヤニヤしながら言うから、「違うって！！」と、家を飛び出した。
ワクワクとドキドキを抱えながら俺は合コンに向かった。

第四話　出会い

「ゴメン、待たせちゃって。出る時、母ちゃんと結に捕まっちゃってさ」
待っていた俊と歩に言った。
「大丈夫だよ。まだ時間少しあるから」と、ジーンズにロングTシャツという、ラフな格好をした歩が、優しく言ってくれた。
が、もう一人の男は違っていた。
「流！！ちゃんと気合い入れろよ！！年上をゲットするチャンスなんだぞ！！」
と、思いっきり今風の、B系できめてきた俊が、気合い入れてます。と言わんばかりに、俺に噛みついてきた…。
「何をガツガツしてんだよ俊。そんなんじゃお姉様達に逃げられちゃうぞ！！やっぱ年上は、落ち着いた男がいいんだよなっ歩？」
と、歩に振ると、
「それはどうかなっ？」と、曖昧に返してきた。すると俊が不安そうに、
「どっちなんだよ！誰か教えてくれぇ～！！」と、叫んだ。

俺達が、待ち合わせのカラオケ屋に着いた時には、もう彼女達は来ていた。
部屋に入り歩が、
「ゴメン、待たせちゃったね」
「え～どうしよっかなぁ？」
と、不機嫌そうに彼女達は顔を見合わせている。
すると、いきなり俊が、「すいません！！機嫌を直してもらえませんでしょうか？俺達、何でもしますので！！」
と、深々頭を下げた。
一瞬シーンとなったが、すぐに歩と彼女達は笑いだした。

「俊！大丈夫だよ。綾(あや)達は、そんな事で怒ったりしないよ」
「そうそう！ジョーダンよジョーダン！！間に受けちゃうんだもん。ビックリしちゃうなぁ～」
綾という、背が高くて、モデル系、目に力が溢れてる子が笑顔で言った。
俊は、「よかったぁ～」
と、ホッとして、しゃがみ込んだ。
「まあまあ、みんな座ろうよ。」
綾の横にいた、女の子が俺達に言ってくれた。その声は驚くほど透き通った、綺麗で優しい声だった。まさに美声だと思った。
そして、百合(ゆり)の横には、もう一人の女の子がいた。緊張しているのかその子は、ずっとうつむいている。何だろう…
「じゃあ～紹介するね。こっちは、幼なじみの俊と流星で、僕は歩。」
「初めまして！！」
と、俊。
「どーも」と、俺。
「今度はこっちね。あたしは綾。それでこっちが、高校からの友達で、百合と美音(みお)。」
「ヨロシクお願いします」と、百合。俺達は、この美声に聞き惚れていた。
次は、美音という子の番なのに一行に話そうとはしない。さっきと変わらず、うつむいたままだった。どこか俺に似ていて、イライラしてきた。
でも俊は、
「緊張しますよねぇ～俺なんて朝から緊張しっぱなしですもん。」
それでも美音は無反応。不思議そうな顔をしてる俺達に、綾はこう言った。
「美音は耳が聞こえないの…連れてきていいのか悩んだけど、歩が『俺の友達は、いい奴だから大丈夫だよ』って言ってくれたから連

れてきたんだけど…良かったかなぁ～？」
「いいも何も大歓迎ですよ！！なっ流！」
と、涙ぐみながら言うので、俺は「あぁ」と答えた。
ホッとした綾は、美音をトントンと叩き、手話をしだした。美音は、俺達を見渡し一度お辞儀をした。そして、顔をあげた美音と俺は、目が合ってしまった…。

聞こえるよ、君の声が。

『怖い…怖いよ…』

その少し脅えたような瞳から俺は、目をそらす事ができなくなってしまった。

第五話　優しさ＝同情…？

俺と美音がボーッと見つめ合ってると、
「おい流！！何、美音さんに見とれてるんだよ！」
と、俺は俊に叩かれた。
「いってぇ～なぁ！！別に見とれてなんかねぇよ」
と、今度は俺が俊に叩き返してやった。すると、美音がフフッと小さく笑った。俺達は何となく恥ずかしくなってきて、くだらない争いはやめた。

食べたり飲んだりしながら、当たり触りのない話を一時間位みんなでした頃、
「そろそろみんな打ち解けてきた頃だし、席替えでもしない？」と、綾が言った。
「いいっすねぇ」
一番先に食い付いたのは、やっぱり俊だった。
「じゃあ割り箸にA、B、C一人づつ引いて」
そう言うと歩は、割り箸に書き始めた。
「さぁ～引いて。俺は余り物でいいよっ」
綾から順に割り箸を引いていった。そして、みんなが引き終わったのを確認すると歩が、「さぁみんな一斉に出してね。せーの！！」
一斉に出された割り箸を見ると、綾と歩、百合と俊、そして俺は、美音と一緒だった。テーブルの下で、小さくガッツポーズしてる俊を横目に、俺は少し不安だった。だって、耳が聞こえないんじゃぁ喋れないし、俺が手話を出来る訳でもない。俺の内心を見抜いたのか百合が言った。
「流星君手話出来る訳ないよねっ？美音と筆談してあげて」
やっぱり百合は優しい。ちょっと俊が羨ましくなった。
でも、俺には一つ気になってる事があった。あの一瞬目があった時

の『怖い…。』と言う言葉が何かひっかかる…
綾と歩は、さすが知り合いだけに共通の話題もあって、楽しそうに話してる。
俊と百合は、カラオケをしてる。って言うか、俊が百合に気に入ってもらおうとして、一生懸命にあれこれやってるって感じだ。
俺と美音はというと、少し時間が経っているのにまだ何も話していない。百合からノートを渡されたが、何を書いていいのかさっぱり分からない。とりあえず、ノートに
＜美音っていい名前だねっ＞
と書いてみた。それを見た美音のペンが、素早くノートの上を走り、
＜そんな事ない！だって、あたしには美しい音なんか聞こえないし、美しい声だって出せない。そんな子に、美音なんて全くあわない。無音の方がピッタリよ＞
そんな風に前面否定されちゃって、次、返す言葉に困ったが、俺は又書いた。
＜そんな事言わないでよ。耳が聞こえなくたって、綾さんと百合さんみたいな、いい友達いるじゃん。＞
すると、すぐにペンは走り出した。
＜はっ！？何処がいい友達なの？＞
＜だって色々気を使ってくれたり、優しいじゃん。＞
＜あんなん優しさなんかじゃない。あたしはみんなが話してる事、口の動きで分かるの。みんな、あたしを見て、可哀想って同情してるだけよ。＞
＜そんな事はないよ。綾さんも百合さんも、美音さんの事、考えてるって＞
＜違う！あの子達は、あたしに同情して優越感に浸ってるだけなのよ！＞
俺は、悲観的な事なっかり言う美音にイライラしてきていた。
＜美音さんの辛い気持ちも分かるけど、友達なんだからもっと信じなよ＞

＜解る？解る訳ないじゃない。そんな綺麗事言わないで！こうゆう身体になった人にしか、気持ちなんて解んないの。私なんてどうでもいいでしょ！？ほっといてよ＞
俺はもう我慢の限界だった。テーブルをバン！と叩き、立ち上がった。みんな一斉に俺に注目した。
「あぁそうだよ！！本当の事言ってやるよ！あんたの気持ちなんて分かんねぇよ！！悲劇のヒロイン気取って、みんなを否定してるような女の気持ちなんて解りたくもねぇよ！！あと、そんな女、言われなくてもほっとくよ！」
そう言って、俺は部屋を飛び出した。
後ろから歩と俊が追い掛けてきた。
「どうしたの流？何があったの？」
「女の子にあんな言い方すんなよ！！」
二人の言ってる事には答えないで、
「ゴメン雰囲気壊しちゃって…先に帰るわ俺」
と、言いたい事言ってスッキリしているはずなのに、俺の心に引っ掛かるものがあった。

ずっと…

第六話　強さと強がり

俺は、家に帰る途中ずっと、自分の言った事を思い返していた。
人に対して、あんなムキになって怒ったのも初めてだったので、自分にビックリしていた。
しかも女の子に…
今更になって罪悪感と、後悔がジワジワと押し寄せてきた。

「ただいま…」
家に着いてそうそう、うるさい女達が出迎えにきた。
「お兄ちゃん、こんな早く帰ってくるなんてフラレちゃったのぉ～？」
相変わらず詮索好きな結は、にこにこしながら聞いてくる。
「違うっ！！まぁいいや。今結と言い争う気分じゃないんだよ俺…」
とぼとぼ二階に上がってる途中、後ろから母ちゃんが、
「ご飯食べないの？」その声を背中でうけて、
「いらな～い…」
と気が抜けたような声で返事をした。母ちゃんが、心配そうに俺の背中を見つめていた事なんて知りもしないで…
そろそろ、日付が変わろうとしていた頃、ベットで寝転んでいると、コンコンとノックされ、
「流、入るわよ」
と、母ちゃんが入ってきた。
「いらないって言われたけど、お節介でご飯持ってきたから食べな」
実は、お腹が減っていたからありがたかったが、いらないと言った手前恥ずかしくて、
「分かったよぉ！食べる」
「そうだよ、ちゃんと素直に食べればいいの」
何故か母ちゃんは、部屋から出て行こうとしないで、俺をジーッと

見つめてくる。いきなり、
「流。今日女の子と喧嘩したでしょ？それも、あんたが、その子に傷付ける事を言った。それで、今になって後悔してるんでしょ！？」
俺はビックリして、食べている手が止まった。それを見て母ちゃんが、
やっぱりそうなんだ！！さすがお母さんでしょ？何でもお見通しなんだからねっ」
母ちゃんが、俺と同じ力を持ってるのかと思った。
「一つ聞きたいんだけど、その人が間違ってると思ったら言ってあげるのって間違いなのかなぁ？」
「それは間違いとは言えないけど、人って共感してくれてる人に言われてると、素直に受けとめられないって事ってあるのよ。まぁその逆もあるけど…言ってあげる事が優しさとは限らないしね」
「そうだよなぁ～タイミング間違えたかなぁ…」
と仰向けになると、母ちゃんが腹をポーンと叩き、
「多いに悩め若者よ」
と言って出ていった。かと思ったら、もう一度ドアが開き、
「どんな理由にしろ、女を泣かせたら承知しないからね」
バタンとドアは閉まった。

その頃、美音もベットに寝転んで考えていた。あの時は、ムカついていたし、あんな奴の言った事なんか気にしない。そう思っていたけど、冷静になって考えると図星だらけで、恥ずかしいとすら思えてきた。
美音はずっと強がって生きてきた。自分を強いと思い込ませながら…。一度弱音を吐いたら、滝のように弱音が出てきてしまいそうだったからだ。
一度もあそこまで他人に言われた事はない。いや、親にだってあんなキツク言われた事はない。初対面で、あそこまで言う無神経な男なのに、何故か気になっている自分に気付いた。

気が付いたら綾にメールを打っていた。

＜今日逢った子に、もう一度逢いたい＞と…

第七話　驚き…

「流！！起きなさ～い」
寝ぼけた頭を遠くの方で、母ちゃんの声が聞こえる。もう少し、もう少し、俺はこの寝ぼけた時間が好きだ。
十五分位した頃、母ちゃんが飛び込んできた。いきなり布団をはぎとり、腹の上に乗って来やがった。
「流！！いいかげん起きなさい！！歩君迎えにきてるのよ！」
「それ早く言えよ！！」
俺は、すぐに起き上がって制服に着替えた。急いで下に行ってみると、父ちゃんの横に歩が座ってコーヒーを飲んでいた。
「流、おはよ」
俺は、昨日の一件があったから少しよそよそしく、
「あっ、うん。おはよ」
「ねぇねぇ歩君、昨日お兄ちゃんフラれちゃったの？」
恋愛話に目のない結は、歩に聞いている。俺は歩なら余計な事は言わないだろうと、安心して牛乳を飲んでると、
「別にフラレた訳じゃないよ。ただ喧嘩しただけだよ。」
俺は牛乳を吹きだ出してしまった。結のニヤニヤした視線を見ないようにして、
「余計な事は言わなくていいんだよ！もう、行こ歩」

家を出て少し歩いたところで、俺は切り出した。
「昨日は、雰囲気壊しちゃってゴメン。俺あそこまで言うつもりなかったんだけど…」
「まぁいきなりだったし、流があんなにムキになってるの初めて見たからビックリしたけど、それなりに事情があったんだろうから仕方ないよ。流が帰った後、フォローしといたから平気だよ」
相変わらず気がきく歩に、

「毎度毎度悪い」
とお礼を言った。
「それはそれと、今日放課後空けておいてね流」
そう言われて、何だろうと思ったけど、「うん」と言っておいた。

学校に着くと下駄箱の所で、明らかに怒ってる俊が立っていた。
「流！！昨日の態度はなんなんだよ！百合さんがビビっちまったじゃねぇか！！俺まで怖がられたらどうすんだよ！！」
「はいはい、ゴメンナサイ。迷惑おかけしました。」
と、丁寧に頭を下げた。
「まぁ俺は百合さんとかなり仲良くなったし、電話番号も聞いて、今度また遊ぶ約束したもんね」
幸せそうに自慢してくる俊が少し羨ましく思えてきた。

今日の授業を終えて、歩と歩いてる途中俺は、
「放課後空けておいてって言ってたけど、何があるの？」
「実は、流に逢いたいって人がいるんだよ」
「俺に逢いたいって誰だよぉ？」
と、不思議な顔をしてると、
「まぁ～行ってみたら解るよ」
と、歩はニヤリと笑い言った。
少し歩いて、駅前の喫茶店で歩は止まった。中に入って、辺りを見渡すと驚いた事に、綾と百合がいた。近付いて行くと綾が
「あっ、来た来た。ゴメンね呼び出しちゃって。とりあえず座って。」
歩はすぐに座ったが俺は、
「昨日はホントにすいませんでした。場の雰囲気壊しちゃって…。後、美音さんにもあんな言い方しちゃったし…」
と言うと、百合が、
「そんなに気にする事ないよ。あの後の雰囲気悪くなかったし平気

だよ。平気じゃなかったら美音も綾に、あんなメール入れて来ないよ」
と百合が言い、俺と歩は意味が解らなくて、
「メール！？」
と聞いた。すると綾が、
「そうそう、その話で呼んだんだった。あのねっ、美音が流星君にもう一度逢いたいんだってさ」
俺はビックリして、
「俺に！？」
て言うと、
「そんなに驚かないでよ。美音はただ、もう一度話してみたいだけだと思うからさっ。それでメールアドレス教えるから、一回メールしてみてくれない？美音には了承とってあるから」
俺は戸惑ったが、
「わかりました。じゃぁ一度メールしてみます」
と言った。少し話をして俺は家に帰った。

家に帰ってきてからずっと、俺はベットの上で携帯を見つめながら悩んでいた。何を打ったら良いのかがさっぱり思い付かなかったが、俺は、頑張ってメールをしてみた。
＜どーも天川流星です。綾さんからアドレス聞いたので、メールしてみたんだけど、昨日はホントにすいませんでした。俺初対面なのに酷い言い方した事を反省しています。
でも、美音さんが悲観的な考えをしていて、すっごく悲しくなっていってしまいました。美音さんの、本当の気持ちはわかんないけど、怖いっていうのは伝わってきた。正直もっと知りたいと思いました。もし良かったら、ホントの気持ちを教えて下さい。返事待ってます。
＞
一度深呼吸して送信ボタンを押した…

第八話　最後の賭け

何一つ音のない孤独感と、淋しさを詰め込んだ美音の部屋に、赤や青、緑、いろんなグラデーションの光が美音の目に飛び込んできた。

携帯を見ると、メールだった。誰からだろうと開いてみると、流星君からだった。まぁ、綾に頼んでおいたのだから不思議はないんだけれど、予想以上に早くメールがきて驚いた。それに、少し嬉しさも感じていた。音のない世界で過ごしていると、世界に自分だけ置き去りにされたような孤独感が、波のように押し寄せてくる。そんな時のグラデーションの光は、少しだけ波を押し返してくれる。メールを見たあたしは、悲しかったとか本当の気持ちが知りたい、と言うフレーズにばっかり目がいってしまう。

『ダメ！！』

あたしの心がストップをかける。こういう言葉に寄りかかって何度も痛い目にあってきたから、素直に喜べなくなってる。特に男の人の言葉には…

でも、流星君は今までの人達と違うように感じた。初対面であそこまで言える人はなかなかいないし（ただ無神経だけなのかもしれないけど）、人と接するのが怖いっていう気持ちも解ってくれた。

それに、あたしに怒ってくれた時の目、あの目はただムカついてるだけの目じゃなかったと思う。耳が聞こえない分あたしには解る。同情の目、怒りの目、思いやり優しさの目、もう一度あたしは自分の勘に賭けてみる事にした。そして、あたしは本当の気持ちをメールに打ち込んだ。

＜メールありがとう。確かに昨日はあたしイライラしてたと思う。実は、綾と百合に半分無理矢理連れていかれたんだ。彼氏探しにって…。だからって流星君に当たって、あたしの方こそ年上なのに大

人げなかったです。ゴメンナサイ…
あたしの本当の気持ち入れるね。
あたし人と接するのが怖い。って言うより、人にどう見られてるのかが怖い。小学校の時、事故にあって、それから耳が聞こえなくなったんだけど、それからはずっと、人の顔色ばっかり窺って生きてきた。親も、友達も、関わる人全て…。あたしの隣には、いつもいろんな恐怖と、孤独感がいるの。
こんなあたしでも好きになってくれた人も何人かいた。でも、結局あたしが重荷になって、適当な別れの言葉を残して去っていってしまうの。偽りの優しい言葉を残してね…。
そんな事繰り返してるうちに悲観的な考えになっちゃったのかもね。流星君に言われた通り悲劇のヒロインなのかもしれないけど…。
あたしの素直な気持ちは、この孤独と恐怖を忘れる居場所が欲しい。ただそれだけだと思う。
ゴメンねこんな長々と。後、流星君が知りたいって言ってくれたの嬉しかったよ。なんてね…
ありがと＞
あたしは、思い付くままに一気に打った。でも打ち終わってみると、恥ずかしくなってきた。送ろうかやめようか三十分位、携帯を持ってウロウロしていたが、意を決して送信ボタンを押した。

俺は、ベットの上でゴロゴロしながら雑誌を読んでいると、携帯が勢いよく鳴った。俺は、ビックリして飛び上がった。俺って結構小心者だなぁ～、と思う瞬間の一つがこんな時だ…。
携帯を見ると美音からのメールだった。ドキドキしながらメールを聞いてみた。
…　…　…そうだったのかぁ、これが美音さんの本当の気持ちかぁ。孤独感と恐怖心かぁ、それは、きっと俺なんかの想像を遥かに越えて苦しいもんなんだろうなぁ。そうゆう気持ちも分かってないくせに俺はあんな事を…。今までにもまして罪悪感が沸いてきた。

でも一つだけ入れておかなきゃならない事があった。
＜返事ありがとう。
美音さんの気持ち、少しだけ解った気がします。でも、解ったなんて言ったらまた美音さんに、何が解ってるのよぉーって、怒られそうだけど…
俺、美音さんに一つ言いたい事がある。美音さんは、自分で気付いてるか分からないけど、自分に対して「あたしなんか」とか、「あたしなんて」と言う言葉を良く使っているけど、そんな事を言わないで下さい！！つーか、美音さんは、自分に対して「あたしなんか」とか、「あたしなんて」を使わなきゃいけない人じゃない！！使わなきゃいけない奴は他に沢山いるよ！！まぁ俺も時々使ってるけど…。でも、やっぱり自分の事は、もっと好きになりたいから使いたくない。
偉そうな事言って、また怒らせたらゴメンナサイ。でも、これだけは伝えておきたくて＞
メールを送信して、今日はもう寝る事にした。
目を閉じると、その奥に出てくるのは、何故か美音のフフッと笑ったあの笑顔だった。

第九話　逢いたい

静かに眠る美音の横で、携帯が光っていたが、それに気付かずに美音は眠り続けた。

一方、俺は珍しく自分で目覚めた。すごいと言うか、奇跡に近い。俺がこんなに早起き出来たのは、美音からのメールが来てないから、気になって気になって夜何回も起きてしまった。今もその一回だ。でも、結局、たくさん目覚めたのも虚しくメールはなかった。着替えて下に降りて見ると、まだ母ちゃんが朝御飯の支度をしている途中だった。俺は、ドアを勢いよく開けて、

「おっはよぉ～♪」

と、入って行くとみんな呆然と俺を見て、

「奇跡だ・・・」

と、三人声を揃えて言った。

「何だよ!!そんなに驚くなよ!!俺だってたまには早く起きる事ぐらいあるよ。」

すると、母ちゃんがすかさず、

「ない!!この何年か流が自分で起きたのなんか記憶にないわよ。頭でも打った?」

「違うよお母さん。女だよ女。最近お兄ちゃんそわそわしてて、何か様子おかしいし」

確かに結の言ってる事はあっていたが、

「そんなんじゃねぇよ!!俺が早起きしたら悪いみたいだなぁ・・・」

と、ちょっとガッカリした。

流星がそんな事をしてる事美音は、起きてメールを見ていた。随分熱い男だなぁと、流星の事を思った。それに、自分の事を好きにな

りたいなんて、使い古されたありきたりな言葉なんて、鼻で笑ってしまいそうになるけど、流星君からだと嬉しくて顔が赤くなってしまう自分がそこにいた。
今日はすごくいい一日になりそうだ。

美音は、いつもはあんまりしない化粧も今日はバッチリ。服も、いつもより明るくてオシャレをした。
大学までの道のりは、美音にとって安全とは言えないが、今日の美音には怖いものなしだ。
教室に向かう途中、肩をトントンと叩かれて振り返ると百合が、
「おはよう」
と、笑顔と手話で挨拶してきた。美音も満面の笑みで、
「おはよう」
と返した。百合が美音の顔や服装をみて、
「今日の美音可愛い。どうしたの?何かいい事あった?もしかして流星君?」
美音はすかさず首を横に振った。けれど、顔は真っ赤になっていてバレバレだ。百合と教室に入ると、綾が近付いてきてさっきの百合と同じやりとりをした。こんな綺麗な二人に「可愛い」と、言われると嬉しいけど恥ずかしくもなる。
綾が何か企んでるような顔で、
「美音!流星君に逢いたいって言ってたけど、もう会う約束したの?」
と聞かれ、
「そんな事恥ずかしくて自分から入れられない」
と手話をした。綾と百合が顔を見合わせた後綾が、美音のバッグから携帯を取り出して、メールを打とうとして出したので慌てて携帯を取り上げて
「何するのよぉ!?」
と、手を早く動かした。

「だって、美音も流星君も奥手そうだし、このままじゃいつまでも進展しないから入れてあげようと思って・・・」
綾が申し訳なさそうに言うから、
「大丈夫!!ちゃんと自分で入れるから」
「いつぅ〜??」
「今度・・・かなっ・・・」
「ほらぁ〜!それじゃぁいつまでも送れないんだから。今入れよ」
綾の押しに負けて、メールを打つ事にした。
＜今度の日曜日に二人で会わない？
無理ならいいけど・・・＞
打ち終わり、送信をためらっていると綾が横から送信を押してしまった。綾は、怒られるのを察知して逃げ出した。
美音はそれを追い掛け回して、二人は笑いながらじゃれあっていた。

昼休みになり、屋上で歩と俊と御飯を食べている時歩が、
「流！昨日美音さんにメールした？」
と、聞いてきた。
「昨日は、1、2回したよ。それで、さっき日曜日二人で会わない？ってメールきたんだけど、どうしたらいいと思う？」
俺達の話を聞いていた俊が、口の中を一杯にしながら、
「何だよ流!!お前と美音さんそんな事になってんのかぁ？俺の知らないところでコソコソコと!!」
食べかすを飛ばしながら話す俊に、
「別にコソコソしてた訳じゃなくて、成り行きでこうなっただけよ。なっ、歩？」
「まぁそんなとこかなっ。俊だって、百合さんがいるんだしいいじゃん」
「当然よ!!俺は百合さんしか見えない!!」
歩が俊をうまく誘導してくれ話は戻った。
「流は、美音さんと会うの嫌じゃないんでしょ？」

「もちろん！！むしろ、この間の事会って誤りたいし、何より、もっと知りたいとも思う。けど、耳聞こえない人とどう接していいのか・・・」
「そんなに深く考える事ないんじゃない？同じ人間なんだし。少しずつかもしれないけど、きっと分かりあえるはずだよ。」
と、歩は年上のように俺を諭してくれた。が、俊は、
「愛があれば乗り越えられない壁はないぞよ、流星！！」
と、子供地味た事をいった。でも、二人の後押しもあって俺はメールした。
＜日曜日ＯＫです。じゃぁ待ち合わせは・・・・・・・・・・＞
打ち終わり携帯を見ていると、いきなり横から俊が送信を押してしまった。逃げ回る俊をおい回し、俺達はじゃれ合っていた。

第十話　初めて知った君の辛さ…

ジリリリーン　　ジリリリーン

流星の部屋に、けたたましい目覚まし時計の音が鳴り響いた・少し経って、やっと流星は音に気付いてうっすら目を覚ました。目覚まし時計を止めてまた布団に戻ってしまった。かと思うと、布団がバッとめくれて流星が勢いよく起き上がった。目覚まし時計を掴んで時間を確認して、まだ待ち合わせには二時間もある事に気付き、やっとホッした。

そう！！今日は、日曜日で美音と二人で会う約束をしていた日だ。

この日が近付くに連れて、睡眠時間が短くなって、昨日なんて朝方まで寝付けなくて父ちゃんの酒を飲んじゃったぐらいだ。夜に、今日の服を選んだりするのも、かなり時間が掛かった。まるで、恋する乙女のようだ…

今日もまた、母ちゃんと結のうるさい質問攻めを何とかかいくぐって家を出た。美音との待ち合わせは、十二時に駅前の太くて大きな木（この駅のシンボルでもあり、日曜日ともなれば大勢の人がいて待ち合わせにも多く使われる）の下だ。待ち合わせには間に合うように家を出てきたつもりだったが、駅に着いた時にはもう十一時五十八分だった。急いで木の周りをさがしたが、何せ日曜日って事もあり人が多すぎてなかなか見つからなくて、美音を発見したのはもう待ち合わせの時間から十分も過ぎた時の事だった。

流星は、息を切らしながら美音に近付いて行き、

「ゴメンナサイ遅くなっちゃって…急いで来たんだけど…」

言葉も途切れ途切れに顔を上げると、美音は背中を向けたままうつむいている。ここでやっと流星は気付いた。美音は、耳が聞こえないんだから喋ってるのを分かるはずがない。そう考えると、生活で色々大変なこともあるんだろうなぁ～と、呆然としていると背後に気配を感じたのか、美音が振り返った。流星は慌てて手を合わして大きく口をあけて、

「ゴメンナサイ！！遅れてしまいました。」

そう言って頭を下げると、美音はバッグからメモ帳ような物を取り出して、そこになにやら書き出した。

＜遅れたのは別にいいよ。初めだって流星君達遅れてきたしねっ。あたし待ちくたびれておなか空いてきちゃったなぁ＞

それをササッと読んで、

「じゃぁ何か食べにでも行きますかっ？お詫びにおごりますから。」

お金はあまりないけど、何故か見栄をはってしまう。

流星と美音は駅の近くにある最近出来た人気のパスタ屋さんに入った。メニューを見て流星はすぐに決まって美音を待ってると、美音がメニューを流星の前に出して指でこれ、と指し示した。流星はこの時もまた、美音の大変さに気付いた。

注文をして、ようやく落ち着いたところで流星は話を切り出した。

「合コンの時は、ホントにすいませんでした。とにかく逢って謝りたかったから今日は来ました。」

ちゃんと頭を下げて謝ると美音は、メモ帳にペンを走らせて、

＜そんなに何回も謝らないで、あたしはもう本当に気にしてないから。それより、何か謝る為だけにに来てくれたいだね！！ありがとう。＞

美音の皮肉たっぷりな言い方にドキッとしてすぐに、

「別にそうゆう意味じゃなくて。」

＜じゃあ、他にどんな理由で来てくれたの？＞

「そりゃもちろん美音さんに逢いたくて」

美音は笑顔で、
＜それでよし。なんてね…　からかってゴメン！！流星君って何かからかいがいがあって面白いんだもん。＞
と、美音はクスクス笑っている。完全に流星は下にみられている感じで参った。こんなやり取りも周りから見たら不思議なのだろう。美音は手話をまじえながらだし、俺達は言葉も交わしていないのに笑いあってるのだから。さっきからいろんな人にジロジロ見られてる気がするのはそのせいだと思う。美音は、こんな重くて痛い視線を一身に受けて生きているのかと思うと尊敬すら感じてしまう。でも、美音はそんな事は感じさせないぐらい今日は元気みたいだ。俺がキョロキョロしていると美音が、
＜そんなに周りが気になる？あたしといるとみんな不思議な顔でジロジロみてくるもんね。ゴメンね。＞
「俺は、別に気ならないけど…　美音さんは気にならないんですか？」
＜あたしは、もう何年もこの身体だからなれてるから平気。でも、あたしと関わる人は気になってるのかもね…　あたしにとってはこの視線は悪い事ばっかりじゃないよ。危ない時何度も助けられた事だってあるし。＞
そうか、美音はそうやって少しずつ強くなってきたんだ。と感心してると、重い視線の方で笑いながら話す男の声がした。
「何だよ、あの女耳聞こえないんじゃねぇの？気持ちわりぃ～なぁ。顔が可愛くてもあんなじゃ付き合いたくねぇよな」
そんな会話聞こえてきてかなり腹が立ったがここは抑えることが出来た。

注文が来て、食べてる時はあんまり話は出来なかった。お互い食べ終わったところで流星が、
「これから何処行きます？どっか行きたい所あったら行って下さいね。」

＜あたし水族館が行きたいなぁ～＞
「いいですね。じゃそろそろ出ますか？」
と、言って席をたった瞬間またさっきの男達が、
「おっ！！帰るらしいぞあの変な女。さっさと帰れっつうの。」
と、また笑いやがった。さすがにもう限界が来て、そいつらの所に駆け寄って行った。その男達の前に立つと、
「何だよお前！！彼女がお待ちだよ！！」
と、ニヤニヤしながら言いやがった。流星は、いきなりそいつの胸ぐらを掴んで顔面を殴りつけた。そして、
「俺の女は、お前らより一生懸命生きてるんだよ！！お前らみたいな奴に否定されるような女じゃねぇ～んだよ！！これ以上侮辱するなら俺が許さねぇ！！」
と、言うとそいつらは、
「すいませんでした…」
と、素直に謝ってきた。それを聞いた流星は、そいつらに背を向けて美音の方へ戻った。店の中はざわついていたが、レジへ行き支払いを済ませた後、店員に一度謝り店を出た。

美音は、店を出て行く流星の背中に何だか強さを感じながらすぐにその背中を追いかけた。

第十一話　水族館

店を出た流星は、複雑な気持ちだった。自分があんな風に他人をいきなり殴ったり、あれほど他人を思いやったりしたのも初めてだった。しかも、美音の事を『俺の女』なんて言ってしまったのにはかなりビックリした。美音には聞こえてないだろうとは思うけど、顔を合わせずらい。そんな事を考えながら歩いていると後ろから美音が、トントンと肩を叩いてきた。振り返った流星は、

「ゴメンなさい…　毎回毎回美音さんと逢ってる時、俺キレてばっかで…　本当最悪ですよね…」

と、うつむきながら言ったので美音がまたトントンして、手話で何言ってるのか分からない。と、手と口で流星に伝えた。流星は、美音の言いたい事を理解して、もう一回同じ事を言おうと話し始めたところで美音が、手を合わせて『ありがとう』とした。流星は、何の事か分からず、

「えっ!?ありがとうって何がですか?」

美音は、メモ帳にペンを走らせて、

＜あたしの為にあの人達を怒ってくれた事＞

「あれ?何で分かっちゃったんですか?」

＜だって、流星君の口の動きで大体の事は分かっちゃったもん。『俺の女』ってところもね＞

流星は、そこまで知られていた事に恥ずかしくなって段々顔が赤くなってきた。

「いや、あれは何て言うかその…　とっさに…」

そういう流星に美音はメモ帳を見せた。

＜ありがとう、本当に嬉しかった。でもあたしなんかの為にあんな危ない事もうしないでね。あたしなんていろんな事言われるの慣れてるし、聞こえないから大丈夫だよ。＞

と、美音は流星に笑顔を見せた。だけど流星は、

「また使ってますよ！！『なんて』、『なんか』。これからは、それ禁止ですよ！！俺は、ああゆう奴許せないんですよ！人の気持ちも知らないで勝手な事ばっかいいやがって！お前も同じ思いしてみろって感じですよ！！」
怒ったように言う流星を見て美音は笑った。そして、メモ帳に書いた。
＜流星君ってそんなに熱い人だったんだねビックリ！！そうゆう役目は俊君だっけ？あの子の担当だと思ってたけど、流星君も似てるんだね。＞
それをよんだ流星はすかさず、
「似てないですよ！！俊程俺熱くないですって…もう参ったなぁ～」
＜そうかなぁ～流星君も十分熱いキャラだと思うよ。まぁ、とにかくありがとね。＞

流星と美音は、微妙な距離を保ちながら水族館に着いた。

二人っきりで水族館に来るなんて恋人みたいだなぁと、お互い思っていたが、そんな事を口にする訳でもなくぼんやり魚をみていると、美音がイルカの前で立ち止まって離れようとしない。しばらく経っても動こうとしない美音に、流星は肩を叩き問いかけた。
「美音さんイルカが好きなの？」
＜うん、水族館で一番好きかな。イルカを見る為に水族館に来てるようなものだしね。＞
「確かにイルカって可愛いし、人間を癒す力もあるって言うしね。俺もイルカを見てると落ち着く。」
＜そうだよね。あたしの世界って、海の中に似てるのかもしれない。浅い所だと、太陽の光で暖かいし、明るい。でも、深い所は冷たくて真っ暗。あたしはそんな海にいる魚と同じ。＞
「深い所に闇があっても、その上には必ず光があるんだから、大丈夫ですよ。」

＜流星君なかなかいい事言うね。＞
そう言った後ちょっと恥ずかしくなってイルカを見ると、首を縦に動かして、
『うんうん、それでいいんだよ』
と、笑ってくれたような気がした。まぁ気のせいかもしれないけど…

その後も水族館をゆっくり見て回ってる時の事だった。少し離れた所で聞き覚えのある声がしたのだ。気のせいかと思い、そのまま角を曲がった時、目を疑ってしまうような光景がそこにあった。

何と！！そこには歩と百合が手をつないで楽しそうにしてるじゃないか。横の美音を見ると、同じように呆然と固まっている。とっさに美音の手を掴んで、歩と百合に見られない所まで逃げて来た。

あれは一体どうゆうことなんだろう…

第十一話　水族館（後書き）

君が聞こえる～ハーモニー～をいつも読んでもらいありがとうございます。メッセージをきれた方、本当に励みになってます。
投稿ペースが遅くて、じれったい思いをしてる方もいるとは思いますが、そのへんは申し訳ありません。
もし、このキャラクターをもっと登場させてほしいなど、意見があれば何でもメッセージ下さい。お返事はさせていただきます。

第十二話　胸の高鳴り

流星は、自分の手がすごく暖かい事にハッとした。歩と百合から逃げてくる時に、美音の手を掴んできたのだった。掴んでた手を急いで離し、美音を見ると少し顔が赤くなってるようにも見えた。

「ゴメンナサイ！いきなり走り出しちゃって…それにしても、どうゆう事なんですかねあの二人。そうゆう事になってるなら言ってくれればいいのに歩。」

＜本当にビックリしたよね！！あたしも百合から、何にも聞いてなかったから…あの二人って付き合ってるのかなぁ？？＞

「どうだろう？そんな事言ってなかったし、そんな素振りだって（俊が百合さんを好きな事知ってるし、応援までしてたのに付き合ってるなんて…ないよな…）見せてなかったし、それはないと思うんだけど…百合さんは何か言ってなかったんですか？」

＜そんな事全く言ってなかった。百合って、自分の事ってあんまり話してくれないから。特に、男性関係の話はしてくれない。百合は、可愛くて優しくて理想的な女の子だからモテのは当たり前なのに、気をつかってか隠すんだ。＞

「そうだったんですか…仲良さそうに見えても色々あるんだね。」

流星と美音は、もしまた歩と百合に逢ったら気まずいので水族館を出た。

＜これからどうする？何かドキドキしちゃってちょっと疲れたね。＞

「そうだ！！美音さんにお願いがあるんですけど、俺に手話を教えてくれませんか？」

＜えっ！？いいけどどうして？＞

「だって、俺が手話出来れば美音さんがもっとスムーズに話せるし、

もっと楽しくなると思って。」
＜ありがとう。そう言ってくれると楽になるし、もっといっぱい話が出来る。あたしからも一つお願いがあるんだけど、敬語やめない？一応年上だけど、気にしないでタメ口でいいよ。＞
「良かった。俺も敬語って苦手なんですよ、あんまり頭良くないから…。」
＜そう？全然そんな風には思えないよ。じゃあその辺の公園にでも行こうか。＞
「そうだね。それじゃ宜しくお願いします先生。」
二人は軽く笑いあって近くにあった公園に行く事にした。

＜手話教えるって言っても何から教えたらいいんだろうなぁ？じゃあまずは挨拶から教えるね。＞
「教えて欲しいって言ったけど何か難しそうだなぁ…。」
そんな弱気な事を言ってると、美音が手話をしだした。手を早く動かして怒ったような感じだった。
「何で怒ってるの？俺何か怒らせるような事言った？」
＜ほらね！！あたしの言おうとしてた事ちゃんと伝わってるじゃん。気持ちを込めて手話すれば相手に伝わるんだよ。だから、流星君にも出来るよ。＞
そう笑顔で言ってくれた事で、更に手話を覚えたいと言う意欲が沸いてきた。
＜じゃあ、挨拶から始めるね。まず…＞
どれくらい時間が経ったのかは分からないが、結構な時間いろんな事を教えてもらった。気付いた時には、もう空は薄暗くなって来ていた。
「もうこんな時間になったんだね。何か楽しくて時間経つのすっかり忘れてたよ。美音さんは、時間大丈夫？」
＜そうだね！こんな時間になってたなんて全然気付かなかったね。あたしは、一人暮らしだし、大人だから時間は平気だよ。それより

流星君は実家だし、未成年なんだから早く帰さないとね。＞
美音は、ちょっと大人ぶった感じで流星に言った。流星は困ったような感じで、
「俺、もう子供じゃないですよ。酒だって、煙草だって当たり前だし！！」
流星は、得意気にそんな事を言うので美音は笑ってしまった。
＜別にそうゆう事じゃないよ。流星君ぐらいの年頃って、みんなそうゆうところで大人になったつもりになっちゃうから子供なんだよ。背伸びしなくていいのに。まぁそんな所も可愛いんだけどね。＞
からかわれてるのに、美音に言われると全然ムカつかない。他の人に、『可愛い』なんて言われたら腹が立つことも、美音だと逆に嬉しくなってしまう。
「参ったなぁ…その通りです。お姉さまのおっしゃる通りです。じゃあ今日はそろそろ帰りますか？俺、家の近くまで送っていきますから。」
美音は、一回うつむいて二人は歩き出した。
　歩いてる途中は、ほとんど会話らしい会話は出来なかった。ただ、美音の横顔を見ながら歩くしかなかった。こんな時、自分が手話をできたらもっといっぱい話が出来るんだろうなぁ、と強く思う。そんな風にして何十分か歩いたところで美音が足を止めた。
＜もう家近くだからここでいいよ。今日は本当に楽しかったし、流星君の事も少し分かったから良かった。どうもありがとう。＞
「こっちこそ楽しかった。まぁ途中ハプニングもあったけど、あれはあれで刺激的で良かったと言う事で。じゃあ、気を付けて帰ってね。」
と、言いながら美音の目をまっすぐ見ると、美音の心の声が聞こえてきた。
『これでバイバイかぁ…また逢ってくれるのかなぁ？聞きたいけど、そんな事女から聞けないし…』
そんな事を、思ってるんだ！！ここで心を覗くのはズルイけど、ど

うしても知りたかった。
＜流星君も気を付けて帰るんだよ。バイバイ…＞
そしてすぐに背中を向けて行ってしまいそうになったので、流星は美音の肩を掴んだ。美音がビックリしてこっちを向いたので、
「また連絡する！今度は俺が行きたい所に一緒に行こうね。バイバイ」
それだけ言うと流星は、後ろを向いて家へと向かった。そして美音は、望み通りの言葉をくれた流星の背中を、少し赤くなった顔で見つめていた。

流星は帰り道本屋に寄って、いろんな手話の本が置いてあるコーナーで、『手話入門』と言う本を買った。これで美音と逢ってない時も勉強して、もっと手話を出来るようにしたかったからだ。
家に着くまで今日あったいろんな事を思い返していた。どんな事を思い反しても幸せな気持ちになれる。こんな暖かい気持ちになれたのは初めてかもしれない。美音といると、知らなかった自分を発見出来て新鮮さもあった。こんな事を考えてる時に、ふと歩と百合の事を思い出した。あの二人はどうゆう関係なんだろう？あの光景を俊が見たらどうなってしまうだろうか…気になって仕方が無い。よし！！明日学校で聞いてみよう。

流星は、幸せと何とも言えない不安感を抱えながら、一人夕日に包まれ家に帰った。

第十三話　優しい嘘

ダッダッダッダッダッダ　バタン

「起きろ～いつまで寝てるつもりだ～！！いいかげん起きないと、携帯見ちゃうぞ！！」
朝からハイテンションの結が、耳元でキンキン声を出すので頭に響いた。でも、携帯だけは見せられないと思い、すぐに起き上がった。すると結が、
「お兄ちゃんって本当に分かりやすいよね。あたし、人の携帯見る趣味ないもん。」
流星は、我ながら情けなくなる。妹にカマをかけられておこされるなんて…。そうやって自分に嘆いていると、結が一冊の本を手に言った。
「何これ？手話の本？お兄ちゃん手話なんて始めるの？何で何で？彼女に進められたの？ボランティアでもするの？それはないか……
ねぇ何、何？」
全くこの妹は、好奇心旺盛とゆう何と言うか、人の事に興味があり過ぎて困ったもんだ。
「俺だってボランティア精神くらいあるよ！まぁ、あおれはボランティアとは全然関係ないんだけどな。ちょっとこれから必要になるかもしれないから一応買っただけだよ。」
そう言った途端、結はパッと顔を上げて、
「お兄ちゃんの彼女耳が聞こえないんでしょ？それで、手話初めようと思ったんでしょ？違ってたらごめんね。」
俺は、ドキッとして結のカンの鋭さが少し怖くなった。でも、今日の俺は何故か結にだったら話してもいいような気がした。
「結の言う通りだよ。でも、まだ彼女じゃないんだ…。俺はもっとその人の事を知りたいと思ってる。だからこそ、手話が必要なんだ。

」
「そっかぁ。何かおにいちゃんカッコいい！！そんな風に相手の為に努力するのって、その人だってすっごく嬉しいと思うよ。頑張って。あたし応援するね。」
「何だよ！！お前がそんなに素直だと調子狂っちゃうだろ。でも、ありがとな。」
二人で微妙に照れ合ってると下から、
「二人とも何やってるの～～？学校遅れちゃうでしょ早く降りてきなさい！！」
と、母ちゃんの叫び声がした。二人は声をそろえて大きな声で、
「はぁ～い！！」
と言って、下へ降りて行った。

いつもと同じようで、どこか違う少し暖かい気分の一日がスタートした。

学校に向かう電車の中、歩と俊を発見した。
「おはよう。今日、雨降りそうじゃない？月曜日の雨っていつもに増してやる気なくすよな。」
「確かに、月曜日に雨降られると最悪だよ！でも、きょうのお前には全然関係なさそうな位いい顔してるじゃん。昨日はそんなに楽しかったのか？」
と、俊がからかうように言ってきた。
「俺、別にそんな顔してないだろ歩？」
「そんな顔してるよ。そうとう仲が深まったんだろうね。」
歩も俊と同じようにからかった顔で言う。
「歩までそんな事言うのかよ！！まぁ楽しかったけど、別に何にもないよ。」
ちょっと照れながら言った。その後俊がハァ～と溜め息を漏らしながら、

「いいなぁ～、俺なんて百合さんから全然連絡ないんだぜ…。俺も二人で早く遊びたいなぁ。」
すると、笑顔で歩が、
「大丈夫だよ、俊だってすぐに二人で遊べるよ。百合さんは、すぐに連絡して軽い女だと思われたくないんだよ。」
昨日、百合と二人っきりで水族館行ってた男のセリフとは思えずビックリした。見間違いだったのかもしれないと思ったが、やっぱりあれは歩だ。そんな事を考えながら歩を見ていると、
「どうしたの流？俺、何か変な事を言った？」
とっさに我に帰り、
「いや、別に何でもない…。」

こんなモヤモヤした気持ちを抱えながら半日授業を終えた。そして、昼休み歩を呼び出した。

「話って何？こんな人気無い場所に呼び出して、もしかして俺に告白？」
歩は、笑顔でそう言うので聞きづらかったけど、勇気を出して聞いてみた。
「あのさ…、昨日歩が百合さんと二人で水族館にいるの見ちゃったんだ。俺と美音さんもその時水族館にいて…俺達の見間違いだったらゴメン。でも、あれは歩だよな…？どうゆう事か説明してくれないか？こんな事、俊に聞かれたらあいつ歩に殴りかかりそうでヤバイと思ったからこんな所に呼び出したんだ。」
歩は、少し驚いたような顔をしたが、すぐに冷静な顔になって、
「そっか、見られてたんだ…それじゃ何の言い訳も出来ないな。昨日水族館にいたのは俺だよ。」
何だか俊の気持ちを考えると悔しくなって、思わず歩の胸ぐらを掴んで言った。
「じゃあ何で俊に、今日の朝言ったみたいな事言うんだよ！！あい

つが真剣に百合さんの事好きか分かるだろ！！あいつは単純だけど、バカみたいに純粋な奴だろ！！それは、歩だってよく分かってるはずだろ！！」
歩は固まったまま何も言おうとしないので、歩の目を真正面から見た。すると、歩の心の声が聞こえてきた。
『流も俊も本当にゴメン…。俺は、優しさってのを勘違いしてたのかもしれない。もう本当の事言わなきゃな。』
『本当の事』ってなんだ？と、思った瞬間、背後から足音が近付いてきた。
「流！！手を話せ！！」
歩から手を離して振り返ると、俊が近付いてきた。どうしてここに？と、思った時にはもう遅かった。ボコッ、と言う音と共に歩が倒れていた。そして、俊が歩に向かって言った。
「何でだよ！！俺、歩の事信じてたのに…俺の事可哀相な奴って影で笑ってたのかよ！！もうお前なんて親友でも何でもねぇーよ！！」
それだけ言うと、俊は背中を向けて去って行った。俊の目には、うっすらと涙が光ってるように見えた。

流星は、倒れた歩と、俊の背中を交互に見る事しか出来なかった。これから俺達はどうなってしまうのだろう…

第十四話　バットタイミング

流星は、空を見上げながらいろんな事を考えていた。何で俊がここにいたのか…、歩の言った、『本当の事』とは一体何の事なのか…。しばらくして歩が、

「殴られたのは自業自得だけど、俊があんなに好きになってるなんて知らなかったなぁ。」

と、言いながら立ち上がった。歩の頬は赤くなっていて痛そうだったけれど、その事には触れないで、

「なぁ歩！『本当の事』って何だよ。」

と、流星がいきなり聞くと歩はすごくビックリした顔で、

「本当の事ってどうゆう事？俺そんな事言った？」

ヤバイ！！それは歩が口に出して言った事じゃなくて、心の中で思った事だったんだ。

「いやいや、百合さんと逢ってたのには本当の、って言うか何か訳があるんじゃないかって思っただけ…。」

何か曖昧な返答をしてその場をしのごうとした。

「そうゆう事ね！流の言う通り、百合と逢っていたのにはちゃんと訳があるんだ。」

百合？？何で歩が百合さんを呼び捨てにしているんだろう？

「話すと長くなっちゃうけど…、百合とは一年くらい前にバイト先で知り合ったんだ。百合は俺の指導係で、いろいろ教えてもらってる内に段々仲良くなって来て、いつの間にか付き合うようになったんだ。でも、すれ違いとか、いろんな事で最近別れたんだ。付き合ってたのは本当に短いんだ。でも、百合がこの間、よりを戻したいって言ってきて、俺にはもうそんな気はなかったんだけど、最後に一回だけ思い出作りにデートしてって言われたから水族館に行ったんだ。それを流と美音さんに見られたって訳だよ。全くタイミング悪いよね…　今更だけど、もう百合と会う気は無いし、俊が百合を

好きな事分かってたから、俺と百合が付き合ってたなんて聞きたくないと思って隠しておいたんだけど逆効果だったみたいだね…。」
歩のその言葉を聞いて、流星は後悔が沸いてきた。自分が余計な詮索をしていなければ俊に知られる事だってなかった訳だし、こんな風に誤解を生む事もなかった。それに、歩を信じきれなくて心の声を盗み聞きしてしまった。今までずっとこの人達の心だけは聞かない！！と決めていたのにそれを破ってしまった…。流星は自己嫌悪でいっぱいになってきた。
「ゴメン。俺が余計な事言ったりしなければこんな事にならなかったのに…。歩は、俊への優しさでしてたのに…。」
と、歩に頭を下げると、
「別にいいんだよ流。どうせいつかはバレる事だったんだし、良く考えればあんなの優しさなんかじゃないよ。偽善だよ…。本当に俊の事を思っていたんだったら、俊に本当の事を話すべきだったんだよ。俊に謝りたいけど口も聞いてくれないだろうなぁ、俊って結構頑固な所あるし。」
歩が溜め息を吐きながら言う。
「それは、俺がちゃんと俊を連れてきて話を聞かせるよ。俺にも責任あるし。」
「話聞いてくれるといいんだけど…」
ポツリと歩はつぶやいた。

夕飯を食べて一人部屋でボーッとしていると美音からメールが来た。
＜流星君に報告があるんだけど、昨日水族館にいたのは、やっぱり百合と歩君なんだって。あたしすごく気になってて今日百合に、意を決して聞いてみたら何と、百合と歩君ってちょっと前まで付き合ってたらしいよ！！今はもう別れてるみたいだけど…。そんな話聞いてなかったらビックリだよね。だから、流星君は歩君に聞かなくていいよ。＞

そのメールを見て、もう遅い…と溜め息がこぼれた。ベッドの上で小さく丸まりながら美音に今日あったことを全て入れて返信を待っていた。すると、すぐに返事は返ってきた。
＜えぇぇぇ～そんな事があったの？でも、別に流星君が悪いわけじゃないから気にしなくてもいいと思うよ。それに俊君だって理由を説明すればきっとわかってくれると思うし。流星君達三人って、そんなに簡単に壊れちゃうような関係じゃないでしょ？あたしにはそう見えたよ。困ったら何でも聞いてあげるから言っておいで。何て言ってもあたしはお姉さんなんだから。＞
ハハッと笑って、その後には暖かい気持ちになった。この暖かい気持ちを全部メールに入れてやろう。と、意気込むものの結局入れたのは当たり障りの無い言葉だった。
＜心強い事言ってくれてありがとう。俺は、明日から俊と歩が今まで通りに戻れるよう何とか努力していくよ。＞
こんな事しか入れられない自分への情けなさも少し感じていた。美音とメールをしていたら、手話の事を思い出して、本を取り出した。いつも勉強なら思いたってやっても三十分と持たないのが、これは時間を感じない位にはかどった。本を読み進めていく内にこんなことが書いてあった。
『手話を早くマスターする為の近道は、好きな人の事を思い、その相手に自分の気持ちを伝えようと強く思って手話をすることです。』と、書いてあった。好きな人…好きな人…、何度考えてもやっぱり美音の顔しか浮かんでこない。やっぱり美音の事を、もう本気で好きになってるんだと確信した。何だか照れくさくて本で顔を覆い、ジタバタはしゃいだ後、本に目を戻すとさっきの一文の後に、
『あなたの大好きな人にしてあげてください』
と、書いてあり、

『好き』

と言う手話が載っていた。

第十五話　守りたい絆

水族館のイルカの水槽の前に、美音と流星がたっている。それを美音自身が上から見ている。これは一体何なんだ？と、思いながらも二人を見ていると美音が、

「あたし流星君の事好きよ。」

と、言っている。

しかも、美音は手話ではなくてちゃんと流星に聞こえる声で言っていた。どうして自分が話せるのか分からなかったが、何だか嬉しかった。そして、美音は流星に笑い掛けると、流星はその笑顔から目をそらして、何か一言だけ言って消えてしまった。そこで、パッと目が覚めた。目が覚めてやっと夢だった事に気付いたが、それでも心はすごく切ない気分で一杯だった。最後に流星が言った一言は、口の動きからすると、『ゴメン』といっていた。美音は、最後の賭けもダメなのかと朝からブルーな気分になった…。

一方、流星も同じ頃夢を見ていたが、流星の方は美音と全く正反対のすごく嬉しい内容になっていた。そんないい夢を見て目が覚めた流星は、すぐに美音にメールを入れた。

＜おはよう。今日はいい天気だし、すごくいい夢見たから気分がいい！！今日から俊と、歩を仲直りさせるために頑張るよ。美音さんも何かいい案があったら教えてね。＞

朝から勢いに任せてメールなんて入れてしまった。でも、自分の気持ちがハッキリ分かると意外と大胆な行動に出る事も平気なようだ。

美音にそのメールが届いて、中身を見た瞬間溜め息がこぼれてしまった。美音にとってメールは嬉しいんだけど、タイミングの悪さだけが悲しかった。でも、一応返事は送っておくことにした。

＜朝からいいメールありがとね。いい案があったら送るね。あたしは嫌な夢見て最悪な目覚めだったけどね…。＞

ちょっと皮肉混じりなメールを送った。

美音とは対象的な流星は、意気揚々と学校に向かった。

駅のホームに着くと、いつもの様に俊と歩がいた。でも、いつもと違うのは、二人の距離だった。電車の一両分位離れて、決して目を合わせようとしない。流星はどっちに声を掛けていいのか分からず結局、三人はバラバラに登校した。こんな事、三人にとって初めてだったからすごく切ない違和感を三人それぞれが感じていた。

いつもの事だけど、こんな時はいつも以上に授業に身が入らない。授業中に歩の顔を見たけど、いつもの様な爽やかさは無くて、影をしょっているように見えた。これじゃ俺達本当にマズイと思い、俊に歩と百合さんの事を全部話すことに決めた。

昼休みになって、俊がクラスの友達いる所に流星が割り込んでいき、

「俊！！ちょっと話があるんだけどいいか？」

と、言うと、

「歩の事なら、俺は何にも話すことないからもういいよ。」

と、言う俊の腕を掴んで無理矢理引っ張って行こうとしたが俊は流星の手を振り払って、

「もう話すことなんてないって言ってるだろ！！今更何を聞けって言うんだよ！！」

と、言う俊の気持ちも分かるけど、ここでは引き下がりたくなかった。

「じゃあ俺達このままでいいのかよ！！俺達ってこんな事で壊れてもいいのかよ！！俊にとってはそんなに簡単なもんだったのかよ！！わかったよ、もう勝手にしろよ！！」

つい、感情的になってしまい、ちゃんと話をしないまま背中を向けてしまった。美音がこの間言ってた通り、最近の自分は俊みたいな熱い人間になってきているような気がする。

学校が終わり、一人でどうしたらいいのかなぁ？とあいていると、遠くから声がした。
「おーい！！流星く～ん！！」
ハッとして、回りをキョロキョロすると綾と百合がいた。二人に近付いて行くと綾が、
「あれ？今日は一人なんだ！なんか元気なさそうだけど何かあったの？」
と、聞かれ、
「まぁいろいろあって悩んじゃって…。」
好奇心の多そうな綾は、話を聞いてあげると言う事で、近くの公園に行った。流星は、問題の張本人の百合がいるからどこまで話していいのか迷ったが、包み隠さずに話す事にした。
一通り全部話し終わると百合はうつ向いた顔をしていたが綾は、
「そんな事があったんだ？でも、百合は、俊君にちゃんと歩君との事話したんでしょ？それなのにどうしてそんなに怒るのかな？」
「えっ！？俊は知ってたんですか？だから余計に怒ってたのかもしれないな…。他の男なら別に怒らなかったかもしれないけど、歩だからこそ悔しかったのかな。俺と俊は、多少だけど歩に嫉妬してる部分があるんですよ。ルックスはいいし、振る舞いとか、男から見てもカッコイイですからね…。」
「でも、歩君と百合はもう終わったんだし、そんなに気にすることないのに。」
「そうかもしれませんね。けど、俊はバカ正直で単純な奴だけど、ひねくれた部分もあってそれで、歩に応援されてるのを素直に喜べなかったんだと思います。」
そんな綾と流星のやり取りを聞いていた百合は、うつ向いた顔をしながら聞いていた。少しずつ申し訳なくなってきた流星は、
「百合さんゴメンナサイ。本人の前でこんな話するなんてデリカシーに欠けてますよね…。」

すると百合は明らかな作り笑顔で、
「あたしは平気だよ。でも、何か歩にも俊君にも悪い事したなってちょっと自己嫌悪かな…。それと、あたしが歩にもう一回会いたいなんて言わなければとか、俊君に中途半端な態度とってた事に反省かな。」
「俺は百合さんを責める為に話したんじゃないし、俺は別に誰が悪いとか全然思ってないですから！！たまたまタイミングが悪かっただけですよ。それに誰かを好きになる気持ちは誰にも止められないですからね。二人の事は俺に任せてください。俺が絶対何とかしますから！！俺達の仲は、こんな事で壊れるような仲じゃ絶対ないですから。」
そうキッパリ言うと、
「流星君ありがとう。」
と、百合が言い、
「頑張ってね！！友達の事も、自分の恋の事もね。」
と、綾はニヤニヤしながら言った。流星はドキッとしたが、力のある眼差しで、「はい！！」と言った。
　そして、二人と別れて一人になった所で、今日一日あった事を美音にメールした。何とかしたい気持ちはあるんだけど、結局の所どうすればいいのかわからなくて、誰かにすがりたくなっていた。
　いや、すがりたかったのは誰かじゃない。すがりたかったのは、この世でたった一人美音だった。

第十六話　喜怒哀楽

綾と百合と話をした日からもう一週間以上も経ったのに、流星達の関係は何にも解決してなかった…。
毎日毎日どうにかしようと悩んで、俊に話をしようとしても、未だに聞く耳を持たないし、歩は自己嫌悪でいっぱいなのか、流星ともギクシャクしていた。でも、そんなある日歩が、
「俺達もうダメだね。こんな事で崩れてるんだから、いつかはきっと壊れてたはずだよ。まぁその原因作ったのは俺なんだけどね。」
そんな歩にイライラしてきて、言ってやった。
「そうだよ！！原因作ったのはお前だよ！！俊もそうだけど、何でこんな事一回でここまで壊れちゃうんだよ！！壊れたら修復しようとすればいいじゃねぇか！！何で諦めてるんだよ！！俺は嫌だからなっ！！絶対に諦めないからなっ！！」
そう言って、俊の時と同じく感情的になって背中を向けてしまった。最近の流星の悪い癖だ。

その日の夕方美音と逢った。たんなる相談の為だけじゃなくて、自分が逢いたい口実に相談を使っただけかもしれない。美音は逢うなり、ノートに何かを描いて見せてきた。
＜流星君、大分疲れてるみたいだね…今日も何かあったでしょ？＞
と、鋭く言い当てた。流星は美音からノートを借りて、今日あった歩むとの事を描いた。それを見て美音が、
＜やっぱり流星君は熱い人なんだよ。それと、歩君と俊君の事すごく好きなんだよ。そんなに思える友達がいてあたしは羨ましいよ。＞
そう言われて少し照れてしまった。
立ち話もなんだからって事で、近くの店に入り、深い話をし始めた。
＜何で歩君も俊君もちゃんと話しようとしないんだろうね？＞

＜そうなんだよ！！二人共諦めモードでイライラするよ。今までにも三人の中で喧嘩は合ったんだけど、こんなにヤバイって感じたのは初めてだよ…。＞
＜もしかしたら、俊君は歩君と百合がよりを戻すのを願ってわざとそんな態度取ってるって事ないかなぁ？＞
＜俊が？あいつはそんな気が利く奴だとはおもえないけど…。それに、俊は、百合さんの事すごく好きになってたんだよ。＞
＜そうかなぁ？俊君は、結構気が利く友達思いの子だと思うけどなぁ。あたしと流星君が初めて会った合コンの時、流星君怒って帰っちゃったでしょ？その後『流星はいつもあんな感じじゃないですから。すごくいい奴で…』とかって、あたし達に長々フォローしてたんだよ。＞
流星はすごくビックリした。いつもそうゆう役目は歩だし、俊がそんな事を言ってくれてるなんて嬉しくもあった。
＜俊がそんな事言ってくれてたなんて…。俺、そんな気遣いも知らないで俊にガツガツ言っちゃってたんだ…。＞
＜でも、そんな事恩着せがましく言うタイプじゃないだろうし、男の人って何かそうゆう思いやりみたいな事を、隠そうとする所あるし仕方ないんじゃない？＞
＜あるある。意外とシャイなんだよね。そんな事利くと、少し話変わってくるなぁ。美音さんの言う事も一理あるのかもしれないなぁ。尚更どうすればいいか悩んじゃうなぁ。＞
＜流星君は、そのままでいればいいんじゃない？二人の事を大切に思って二人に接していれば、何かのきっかけでうまくいく時もあるよ。漠然としたアドバイスでゴメンね。＞
全然そんな事はなかった。確かにここ最近力が入りすぎてたのは事実だし、早くしないと、早くしないとって焦りもあったから、美音の言葉はすごく気持ちを楽にしてくれた。
＜それもそうですよね。どこでどうなるのかなんて分かんないんだし、あんまり力いれ過ぎててもダメですよね。俺、美音さんに話し

て本当に良かったです。＞
＜いいのいいの。あたしでよければ何でも聞いてあげるよ。いいアドバイスできるか分かんないけど、流星君の力になれるならなりたいし。＞
すごく嬉しくて、顔の筋肉が緩むのを抑えられなさそうだったので、下を向いた。浮かれた気持ちを表情で悟られないように、顔を引き締めた後顔を上げて次の話を切り出した。
＜七月七日に俺の誕生日が来るんだけど、毎年海で誕生日パーティーしてるんだけど、もし良かったら綾さんと百合さんも誘って、三人で来てくれませんか？＞
＜そうなんだ？七夕が誕生日なんだ！！すごくロマンチックだね。でも、そんな所にあたし達がお邪魔してもいいものなの？＞
＜全然いいよ。いつもは、俺の家族、歩、俊、何人かの友達でやってるんだけど、誕生日パーティーって感じなんて全然なくて、みんなでワイワイ騒ぐって感じだから。おまけに、俺の誕生日がある感じ。＞
美音は、ノートを見て一瞬笑った。
＜そっかぁ、何か楽しそうだね。綾と百合にも声かけてみるけど、歩君と俊君は来るの？＞
＜それは俺が何とかするよ。でも、百合さんは来づらいのかなぁ？＞
＜それは、あたしが何とかするよ。そうゆう日は、楽しくしたいもんね。＞
＜ありがとう。織姫と彦星が出会う為の天の川みたいに、俺が歩と俊の天の川になって見せる！！なんてね…。＞
ノートを見て二人は笑い合った。こんなたわいもない会話がすごく楽しくて、幸せを感じた。流星がそんな事を考えている時、美音も同じ事を考えていた。美音は、ずっとこの間見た夢の事が気になっていたので、流星の笑顔を見るだけで嬉しかった。でも、やっぱり少し気になっていたので、流星に探りを入れて見た。
＜流星君って、好きな子とかいないの？＞

流星は、美音がいきなりそんな質問をしてくるのでドキッとした。
＜好きな人？？いる事はいるんだけど、多分片思いだと思う…。そうゆう美音さんはいないの？＞
美音は、質問を返されて動揺した。
＜あたしもいることはいるけど、こっちも片思いだと思うよ…。＞
一瞬の沈黙の後、二人は目を合わせ、ノートを使わず、言葉で、

「頑張ってね。」

と、

言った。

第十七話　織姫と彦星

いよいよ、誕生日を明日に控えた日の夜、流星は早々と布団に入り、今日にたどり着くまでの何日かを振り返っていた。
まず、俊を強引に呼び出して歩の事をちゃんと説明して、誕生日パーティーの時だけは普通にしてくれと何とか説得して、歩にも、俊は大丈夫だから来てくれと頼んだ。その後、美音に連絡をして、これでやっとみんなが来てくれる事になった。かなりの力を使った気がする。でも、これも美音と楽しく自分の誕生日を過ごしたいと言う目標もあったから頑張れたのかもしれない。そんな事をボーっと考えていたら何時の間にか眠りに着いていた。それは、まだ十一時の頃だった。

十二時ちょうど流星の携帯にメールが届いた。しかし、流星はもう深い眠りの中で起きる気配はなかった。

「流！！起きなさい！！もうみんな来てるわよ！！」
「お兄ちゃん置いていくよ！！」
と、うちの女達の声が耳に飛び込んできた。布団の中、寝ぼけた頭をフル回転させて考えた。その数秒後、慌てて飛び起きた。
「すぐ行くから待ってて！！」
と、叫んで急いで着替えを始めた。何を着ていいのか、何をどうすればいいのかさっぱりわからなくてパニックになってると、いきなり部屋のドアが勢いよく開いた。
「おっはよー！！主役が寝坊してどうすんだよ！！」
俊が笑いながら入ってきた。
「俊！！そこの服取って！！」
俊に手伝ってもらって、焦りながらも着替えを終えて部屋を出ようとすると俊が、

「おい流！！携帯忘れてるぞ！！」
と、言ったが、いらないと言って下に降りてしまった。
下へ降りると、綾、百合、美音、歩、結、母ちゃん、父ちゃんが勢ぞろいしていた。流星が部屋に入ってくるなりみんな笑っていた。流星は、少し赤くなった顔で、
「ごめんなさい！！」
と、深く頭を下げて謝ると、それを無視するかのように母ちゃんが立ち上がり、
「さぁ～みんなそろそろ出発しよっか。」
と、言って後、みんな一斉に動き出した。みんなぞろぞろ出て行き、最後の父ちゃんが流星のケツをポンと叩いて出て行った。流星はその後を急いで追いかけて行った。
車の中で自己紹介なんかを軽くしたり、母ちゃんと結の、みんなへの質問攻めなんかをしている内に海に着いた。
今日は幸い雲一つ無い晴れた日で、海がキラキラ光って見える。荷物を降ろして、いろんな準備が整った所で母ちゃんが、
「それじゃ～男性陣は、魚を釣ってきてちょうだい！！女性陣は、バーベキューの下ごしらえをしま～す。」
と言った。流星はドキッした。歩と俊を同じ空間に置くなんて危険な事…。そう思ってた時綾が、
「あたし全く料理とかダメなんですよね。包丁持つと危険ってよく言われるし、あたしも釣りじゃダメですか？？」
「それなら仕方ないわね…。それじゃ～行動始めぇ～。」
綾の料理が出来ないと言うのが本当か嘘かは分からないが、とにかく心強い人が来てくれて少しホッとした。
釣りのポイントに向かう途中歩と俊の微妙な距離を保っていた。ポイントに着いて、釣りを始めた。綾は釣りをした事がないと言うので、みんなのを観察していた。少し時間が経って綾が流星の横に来て聞いてきた。
「あの二人って本当に仲直りしたの？そんな感じじゃないよね？」

「実はそうなんです。二人を何とか説得して来てもらったって感じですよ…。」
「じゃ～本当の意味で仲直りさせなくちゃね！！」
そういうと、綾が、歩と俊の間に行って、
「ねえねえ二人ともそろそろ仲直りしないの？それでいいの？」
流星は慌てて綾に近付いて行き、
「綾さん！！今日はその話しなくても！！」
「今日だろうが、明日だろうが、いつかは話さなきゃならないんだから、今だっていいでしょ？」
「そうだけど…。」
流星は返す言葉を無くして黙っていると歩が、
「そうだよね。いつまでも逃げてちゃダメだよね…。俊、俺が悪かったよ！本当にゴメン！！百合との事隠して、俊を傷付けた事謝るよ。」
歩が頭を下げると俊が、
「何謝ってんだよ！！百合さんとお前が付き合ってた事なんてしってたんだよ。俺は、そんな事で傷付いてなんか無いし、そんなんで怒ってたんじゃねぇ～よ！！」
「それならどうして…？」
俊が歩に背中を向けて言った。
「俺は、お前が百合さんとの事を隠してた事に腹を立ててたんだよ！！俺達って、今まで何でも話してきたじゃねぇかよ！！それなのに隠し事なんかしやがって！！俺達ってそんな仲だったのかって悔しかったんだよ！！お前を殴ったのは、お前に嫌われようとしたんだ。好きになった女がお前を好きで、初めは悔しかったけど、お前で良かったと思ってる！！俺の信用してるダチなら、好きな人を任せていいと思ったんだ！！まぁ～俺のものじゃねぇけどな…。そうゆうお前の遠慮にムカついたんだよ！！」
歩は俊の本音を知って涙ぐみながら、
「本当にゴメン！！俊がそんな風に思ってくれてるなんて知らなく

て…。」
その言葉を聞いた俊も肩が少し震えてるように見えた。俊が振り返って言った。
「もういいよ！！その代わり、俺の分も百合さんの事幸せにしてあげなかったら許さないぞ！！お前だって百合さんの事嫌いじゃないんだろ？」
「嫌いじゃないけど、俺はもう戻る気は…。」
「ゴチャゴチャ言わないで戻ればいいんだよ！！わかったか！？」
「はい…。」
そのやり取りを聞いていた流星は、これでいいのか？と、思う部分もあったけど、とりあえず仲直りが出来たんだからいい事にした。
それまで歩と俊のやり取りを何も言わずに見ていた綾が、
「これで一件落着ね。二人とも握手して！！それでもうこの話は終わり！！」
歩と俊は、綾の言う通り握手した。二人の頬は真っ赤になっていて、改めていい友達を持ったなぁと実感した。そんな俺達のやり取りを、少し離れた所で釣りをしながら聞いていた父ちゃんが呟いた。
「若いっていいよなぁ～～。」

と…

その頃母ちゃん達は、野菜を切ったりしながら楽しそうに話をしていた。でも、美音はキョロキョロして一生懸命にみんなの口の動きを読むのに必死だった。美音はそんな感じで、少し居ずらさを感じていた時だった。目の前に指が出てきて、ぎこちなく動いた。その相手は、母ちゃんだった。指の動きと口の動きで、『いつも流星がお世話になってます。』と手話をししたのだ。結、百合、美音の三人はすごくビックリした。結がすかさず聞いた。
「お母さん、手話なんて出来たの！？」
そう結に聞かれた母ちゃんは、
「流の部屋掃除してた時に手話の本見つけたからちょっとだけ勉強

してみたんだ。」
と、ちょっと照れながら言った。
「ちゃんと伝わったのかなぁ？」
と、美音に向かって聞いた。美音はその口の動きで理解して、うんうんと頷いた。その後は、百合を間にして四人で女だけの会話を楽しんだ。美音は、母ちゃんの優しさのおかげでそこからはしごく楽しそうで笑顔もたくさんこぼれていた。

どれぐらいだか時間が経って、みんなが合流した。そしていよいよバーベキューが始まった。みんながグラスを持って（中身は、ビール！！何故かこの日だけは、母ちゃんも父ちゃんも酒を許してくれた）円になった。そして母ちゃんが、
「天川流星君十八回目の誕生日おめでとう～～～～乾杯！！」
と、甲高い声で掛け声をかけるとみんなも、
「おめでとう～～！！」
と言ってくれた。一人喜びに浸っていると、母ちゃんが何かを渡してくれた。
「これは家族から。流が前から欲しがってた物はいってるから。」
と、満面の笑みを見せた。ワクワクしながら仲を見る愕然とした。何と中身は、参考書だった。みんな一斉に笑いだし、
「受験だもんな！！いい物もらったじゃん！！感謝しろよ！！」
等等と、口々にいろんな事を言う。パチンと母ちゃんが手を叩くと、みんなバーベキューの肉へと方向転換してしまった。これで流星の誕生日は終わり！！まぁ、何もないよりは全然ましだからいい事にした。

その後酒を飲んだり、食べたりして楽しく過ごしていたが、一つだけ気になる事があった。何か美音の態度がいつもと違う感じがした。でも、気にしないでみんなでワイワイやってると結が隣に来て言った。
「お兄ちゃんの好きな人って美音ちゃんなんだね。かわいらしい人

だよね。お母さんも気にいってるみたいだし良かったね。でも、お兄ちゃんのタイプは百合ちゃんにも思えたんだけどね。」
さすが結は鋭い！！第一印象は百合だし、外見的なタイプで言ったら百合が理想に近いんだけど、やっぱり好きになるのは外見だけじゃないんだって改めて思い知らされた。
「そんな事ないよ！！俺が好きなのはあの人だけだよ。」
酒が回ってきたのか、結にストレートに言ってしまった。
「まぁ～頑張ってね。こうゆう綺麗な所で告白されると女の子って意外と弱いから。」
と、結が笑顔で言って戻って行った。
時間が経って、夕日が綺麗に見える。みんな片付けに掛かってるところで美音が一人、手があいてるみたいだったので、チャンスだと思って美音を誘い出した。
　美音と二人みんなから離れたところに来た。何を話そうか考えていると、美音がバックの中から何か小さな袋を渡してきた。流星は、俺に？と、自分の顔を指指すと、美音はうん、と頷いた。流星は中を見て笑顔になった。そこにはイルカの小さなガラス細工と、イルカのストラップが入っていた。流星が顔を上げると美音がノートを見せた。
＜お誕生日おめでとう。今日はすごく楽しかった。それはあたしからのプレゼント。大した物じゃないけどとっておいて。＞
流星はそれ見て、大きく首を横にふった。流星は満面の笑みでありがとうと手話でした。嬉しさと、景色の良さと、少しの酒の力もあって、自分の本当の気持ちを言う事にした。美音からノートを借りて書いた。
＜俺は、今日と言う日を美音さんと一緒に過ごせて幸せだよ。第一印象は最悪だったけど、逢うたびに好きになって行った。こんな幸せな気持ちになったのは初めて！！あんまり長々と思いを伝えるのは得意じゃないから単刀直入に言います。＞
そこまで書いたところで美音にノートを見せた。美音が読み終わっ

て顔をあげたところで流星は手話で、

『美音さんの気持ちはわからないけど、俺は美音さんの事が大好きです。もし宜しければ、付き合ってください。』

と、おぼつかない手つきでした。美音は顔を赤くしてノートに何かを書きだした。まぁ、顔が赤いのは、夕日のせいかもしれないけど…。美音がノートを流星に差し出してすぐにみんなの所に走って行ってしまった。嫌われたのかと思ったがとりあえずノートを見てみた。

＜返事はもうシンデレラが帰る時間に伝えてあるよ。＞

とだけ、書いてあった。何のことだかさっぱり分からなくて呆然としていると遠くから、

「おいていくわよ～～～！！」

と、甲高い母ちゃんの声がした。そしてモヤモヤした気持ちを抱えながら家路に着いた。

夜になり、熱くなって窓を開けると空には満天の星空が広がっていた。そしてベットの方を見ると携帯が光っていた。誰かからメールが来ていた。中を見ると、

七月七日　０時

美音

＜お誕生日おめでとう。あたしは、もうこの気持ちを抑える事が出来ません。流星君はどうか分からないけど、あたしは流星君が大好きです。来年のこの日もこうして０時ちょうどに、この世で一番最初にあなたにおめでとうを言いたいです。＞

と書いてあった。流星はびっくりして腰を抜かしてしまった。シン

デレラが帰る時間…。そうゆう事だったのか！！今日は本当に今まで生きてきた中で一番幸せな誕生日になった。

こうして流星と美音の心の中に天の川がかかって、織姫と彦星のように結ばれる事が出来た。そして、空にも天の川はちゃんと輝いていた。

第１８話　新たなるスタート

織姫と彦星の心が一つになってから少しの時が経った。

＜おはよう。今日で期末テストが終わりだよ。昨日あんまり寝てないからだるいよ…。＞

流星の朝は、こんな風に美音にメールを送る事から一日が始まるようになった。それは、美音も同じで、起きた時と寝る前のメールはお決まりになってきた。そして今日は、付き合って初めて美音に会う事になっている。

学校へ行くのは、前のように歩と俊と一緒だ。歩は、俊に言われた通り百合とよりを戻したらしい。俊はと言うと、何と！！綾と付き合っている。流星の誕生日パーティーの時、俊の熱さに魅かれてしまったらしくて、その日に綾が告白してすぐに付き合ったらしい。綾の行動力には驚いたが、俊も百合を好きだったはずなのに、切り替えの早さに驚かされた。これで、三者三様の幸せを手に入れた訳だ。これからも今のままの幸せが続いていってくれればいいと思っていた。

期末テストを上の空な感じで終えて、美音との待ち合わせの店まで急いで向かった。店に着いた時には、少し汗がにじみ、息も少し切れていた。店に入り店内を見渡したが美音はまだ来てないみたいだった。席に着き、コーヒーを頼んで、水を飲んで落ち着いたら、今度は緊張が沸いてきた。気持ちを伝え合って初めてだから、どんな顔をしたらいいのか、訳が分からなくなってきた。そんな時、店の自動ドアが開いて美音の姿が見えた。店内を見渡す美音と目が合って、美音が照れたようにうつ向きながら近付いてきた。席の前まで来た美音が手話で、

『久しぶり。って言っても、毎日メールしてるんだけどね。』

と、照れ笑いをしながらイスに座った。その後、沈黙が少し流れ、

慌てて流星が、
『何か飲む？』
と、聞いた。美音はすぐに、メニューのオレンジジュースを指した。
流星は、オレンジジュースを頼んであげて、
『オレンジジュース好きなの？何か可愛いね。』
と言うと、美音は顔を赤くして、
『子供みたいだよね。何か恥ずかしい…。』
と、言った。流星はその美音の仕草にすごく愛おしさを感じた。やっぱり、目の前に好きな人がいるって言うのは、すごく幸せな事なんだと改めて感じた。そんな事を考えていると美音が、
『流星君すごく手話うまくなったね。本でいっぱい練習してくれたの？』
と、言われてドキッとした。何で手話の本で勉強してる事を知っているんだろう？と、不思議になって聞いてみると、誕生日パーティーでの母ちゃんの事を聞いて理由は分かったが、かなり恥ずかしくなった。余計な事教えてぇ～と言うような不満そうな顔をしてると、
『あたし嬉しかったんだよ。流星君のお母さんが、気を使ってくれた事も、流星君がそこまでして手話を覚えようとしてくれてた事も、涙が出そうになるくらい嬉しかったよ。』
その美音の言葉に照れてしまったが、流星自身もそう言ってもらって嬉しかった。実際の所、テスト勉強もそこそこに、手話の勉強ばかりしていたのだから、多少うまくなってるのは当然と言えば、当然なんだけれど。
『俺、もっと美音さんの事知りたくて、いっぱい覚えたんだ。だから、これからはなるべく手話で会話しようね。それと、一つお願いがあるんだけど、流星君って言うのそろそろやめない？君って、ちょっと遠い感じがして微妙なんだよね。もしイヤじゃなければなんだけど…。』
『イヤじゃないけど、何か恥ずかしいな。じゃあ流星君も、さん付けるの禁止ね。それなら頑張ってみる。』

うん、と頷いて二人は優しく笑いあった。その後も付き合い初めだからこそするような新鮮な会話を延々としていた。どれだけの時間が経ったのかも分からないぐらい話していたような気がする。それなのに全然時間が足りなくて、どんどん一緒にいたいって気持ちが膨らんでくる。ふと、外を見るともう真っ暗になっていた。そんな中美音が、

『そろそろ帰ろうか？時間も遅くなってきたし…。』

『そうだね。じゃあそろそろ…。』

すごく切ない気持ちが押し寄せてくるのを頑張って抑えて、席を立った。

『もう暗いし、近くまで送って行くよ。』

と言って、二人で歩きだしたが会話がない。もう辺りも暗くて手の動きが見えないから会話が出来ない。こんな時は少しもどかしさを感じてしまう。その時、美音は流星と少し違うもどかしさを感じていた。ホントに自分で良かったのか、普通の女の子ならこんな沈黙はないはずなのに…。不安の方が段々強くなってきていた。そんな事をお互い考えている内に目的地に着いた。

『今日は楽しかった。送ってくれてありがとね。』

『俺もすごく楽しかったよ。もうすぐで夏休みになるから、いろんな所に行って、いっぱい思い出作ろうね。』

『うん。それじゃあバイバイ。』

『バイバイ。美音。』

流星が思い切って、家で何回も練習した通りに手を動かした。すると美音は、ちょっと照れながらも、

『バイバイ。流星。』

と、返してくれた。こんなに自分の名前を呼ばれる事が嬉しい事なんだって初めて知った。

二人は、すごく暖かい気持ちを抱えながら別々の家路に着いた。

第１８話　新たなるスタート　（後書き）

君が聞こえる～ハーモニー～を呼んで頂いてるみなさんありがとうございます。

今回は、投稿するのがすごく遅くなってしまい申し訳ありませんでした。最近プライベートで色々あって遅くなってしまいました。これからはまた、ペースをあげて書いていくので、今後とも宜しくお願いします。

第１９話　異変

今日からやっと夏休みが始まる。毎年、ダラダラして過ごしている夏休みだが、今年はいつもと気分が全然違う。それはやっぱり美音がいるからだ。美音といっぱい思い出を作っていきたい。

いつもダラダラしている流星だけれど、夏休みに、一週間だけばあちゃんの家に行くのだけは欠かした事がない。毎年歩と俊と結で行っていたが、今年は美音達も一緒に行けたらいいなぁ～なんて、密かに思ってたりする。

「流星！！いつまで寝てるの？もうお昼よ！！夏休みだからって、いつまでも寝てるんじゃな～い！！」

クーラーをかけたまま寝たらしく、気持ち良く昼までねてしまった。起きてすぐに携帯をチェックしてみると美音からメールがきていた。

＜おはよう。多分、流星はまだ寝てると思うけど、あたしはこれからレポート書いたりしようと思います。起きたら返事ちょうだいね。＞

あちゃ～、俺が遅くまで寝てる事バレバレかぁ～と、苦笑いしながらメールの返信をした。

＜おはよう…。って言うか、もうこんにちわなんだけどね…。俺は、夏休みになるといつも昼ぐらいに起きて、宿題を夏休みの最後の何日かで焦ってるような、典型的なダラダラ学生だから、美音みたいに早く起きて宿題してる人は尊敬しちゃうよ！！

でも、美音と会う時はちゃんと早起きするから安心してね。＞

流星はメールを送った後下に降りていくと、母ちゃんが洗濯物を干していた。母ちゃんは洗濯物を干す手を止めずに言った。

「流は、毎年毎年同じだね。彼女が出来たから少しは変わると思ったんだけど、変わりそうもないね。」

呆れたような言い方をされてちょっとへコんだが、悔しくて言い返

してやった。
「ちゃんと明日からは早く起きるよ。俺だって一応受験生なんだから、勉強しなきゃ。今日は、充電だよ。」
苦しい言い返しだったのですぐに母ちゃんに切り替えされた。
「そうだよね受験生だもんね。どこでもいいから入れればいいんだけどねぇ。まぁ頑張りなさい。」
結局、軽く流された感じだ。口で母ちゃんには勝ち目はないらしい。
その後、朝ご飯とゆうか昼ご飯を食べて部屋に戻ると、美音からメールが届いていた。
＜やっと起きたね。流星はダラダラ学生って感じはしてたけどね。あたしと会う時は大丈夫って言うけど、流星はいつも遅刻ばっかりだよ。ホントに大丈夫かなぁ！？まぁ、あたしは待つの嫌いじゃないから平気だけどね。それより、受験生なんだからそろそろちゃんと勉強もしないとダメだよ！！もしわかんなかったら教えてあげるから。＞
美音が教えてくれるなら勉強も楽しくなりそうだ。なんて、一人でニヤニヤしながら美音のメールを読み返していた。
＜そうだね！！受験生として今から図書館で勉強をして参ります。＞
と、美音にメールを入れて意気揚々と図書館に向かった。
　図書館に着くと、真面目そうな受験生らしき人達が大勢いた。静かな中にもすごい闘志と言うか、やる気の漲ったオーラの漂うこの空間に居ずらさを感じたが、席を見つけ座った。勉強慣れをしてない流星は何をどう勉強していいのかよく分からないので、とりあえず夏休みの課題をする事にした。
　一時間が経ったくらいの所で集中が切れて、ペンで遊んでいたらペンが隣の人のノートの上に落ちてしまった。流星はハッとしてすぐに、
「すいません。」
と言って、隣の人の目の前に手を伸ばしたらその人がペンを取ってくれた。

「ありがとうございます。」
と、ペンを受け取ろうとした時にその人と目が合ってしまった。
『勉強の邪魔しやがって！！』とか、『やる気ないなら帰れよ！！』とか、その人の心の声が聞こえてしまうだろうと覚悟していたのに何も聞こえてこない。おかしいなぁと思いながらも、ちょっとホッとしていた。でも、気になってならない。もしかしたら目が合っていなかっただけなのかもしれないが、すごく引っかかる。それがあってからは、その事ばかり考えてしまって勉強が手に付かなくてそのまま家に帰った。
　さっきの事が家に帰ってきても気になって、結に頼んでしまった。
「結！頼みがあるんだ。変な事言うけど気にしないで言う通りにしてくれ。」
「なぁ～に？？ホントに変なことなら断るからね。胸触らして欲しいとか。」
「誰がお前の貧乳なんか触りたいかよ！！そんなんじゃなくて、俺の目を真っ直ぐ見てくれ。ただそれだけでいいから。」
「ホント変なお願いだね…。まぁいいや。」
渋々ながらも結は言う事を聞いてくれた。そして結の目を真っ直ぐに見た。すると、
『何なんだろう。兄妹で見つめ合ってるのって変な光景。もしかしてお兄ちゃんあたしの事好きなんじゃ？』
と、バカバカしい結の心の声が聞こえてきた。思わず、
「そんな訳…」
と、口に出してしまった。慌てて、
「ありがとな、もういいよ。」
と、結に言うと、不思議な顔をしていた。
　やっぱりあれは目が合っていなかっただけなのかな？と、思うことにした。この能力を持ってから何度もいらないと思ってきたのに、いざ無くなったかもしれないとなったら不安になっている自分がいる。不思議なものだなぁ、この能力が無いと不安になるなんてどう

したんだろう。

この時はまだ、異変をこの程度にしか考えていなかった。

第２０話　夏の始まり

今日は受験生らしく図書館で勉強をしている。この間、ペンを落とした時と同じ席に座っている。何でかよく分からないけど、この前の事がまだ少し気になっていたのか、自然とこの席に吸い込まれてきた。

今日は、流星の勉強を見に美音が来てくれる事になっている。恋人同士が図書館で勉強なんて、何か青春だなぁなんて、思いながら勉強をしていると肩をポンポンと叩かれた。振り返ると美音が笑顔で立っていた。

『遅くなってゴメンネ』

『全然いいよ。勉強あんまりはかどってなかったし。』

そんな会話をして、美音が席に座るなり、

『さぁ、今やってる所見せて？』

楽しい会話がまだ終わってないのに、もう勉強なのかよと思ってしまった流星だったが、参考書を美音にみせた。美音はしばらく参考書を見た後、

『何か懐かしいな。あたしも受験の時は、綾と百合とで図書館に来て、毎日のように勉強してたな。』

と、昔を懐かしんで笑った。流星は、そんな無邪気な美音の笑った顔が可愛くてたまらなかった。ここが人気のない森の中だとしたら、確実に抱きしめているところだ。でも、ここは夏休みで人気の多い図書館…。

思い出に浸っている美音をポンポンと叩いて現実に引き戻して、

『勉強はどうするんですか？先生。』

と、流星が笑った顔で言うと美音が、

『ゴメンゴメン。ついつい自分の時の事を思い出しちゃって…。それじゃ今日は、この３０ページをやってみよっか。』

と、美音が参考書を流星に渡した。

二時間くらい勉強して休憩する事にした。
『流星全然勉強できるじゃん！！あたしが教える事ないくらいだよ。』
『そんな事ないよ！！美音と一緒にやってるからいい感じに進んでるけど、一人でやってたら全然集中できないもん。先生がいいんだよ。』
それを聞いた美音は、少し顔を赤くしながら笑っていた。
『受験生がこんな事言っていいのか分かんないんだけど、８月に入ったら毎年歩達と、俺のばあちゃんの所に遊びに行くんだけど、美音達も行けたらいいなぁって思ってたんだけどどうかなぁ？』
『そうなんだ。あたし達も毎年夏休みに三人で旅行してるんだけど、今年の行き先がまだ決まってないから、予定があえばいけるかもしれないね。』
『そっか！！行けるといいなぁ～。ばちゃんの家は田舎だからすごく広いし、花火大会も大きいのがあるから、美音ともいっぱい思い出作れるからいいと思ってさ。』
美音はまた顔を赤くして喜んでくれた。その時ふと、この間の事を思い出した。この場所、この席で起こった流星にとっての大事件だ。結で確かめて、その疑いはなくなったはずだけれど、やっぱり心に引っかかっていたので、美音の目を見つめた。すると、
『流星と旅行かぁ～。何かドキドキしちゃうな。逢うたびにどんどん好きになって、いろんな流星がわかってきてる。こんなに好きになれて本当に幸せ！！ありがとう流星。でも、こんな事恥ずかしくて言えないけど。』
と、頭の奥の方でしっかり聞こえてきた。確かめる為に聞いたつもりだったのに、思わぬ形で美音の本音と遭遇してしまった。こっちまで顔が赤くなって、美音から目が離せなくなった。そして、そのまま美音を見続けていると、目の前で手が行ったり来たりした。不思議そうな顔をしながら美音が、流星の顔を見ていた。

『あたしの顔に何か付いてる？』
と、聞かれて、流星は慌てて首を横に振った。いつもそうだ！！この能力を使った時は、何故か不自然な反応をしてしまう。いつになっても慣れない部分だ。
『そろそろ勉強に戻ろうか。』
二人は、頬を赤く染めたまま再び勉強を始めたのだった。

その頃、歩と俊が公園でキャッチボールをしながら話していた。
「なぁ歩！！綾さんて俺につりあってるのかな？最近思うんだけど、俺達ってノリで付き合ったみたいなところあるじゃん！！それなのに綾さんすごく尽くしてくれるんだよなぁ！！あんな綺麗な人が色々してくれると不安になっちゃうよ…。俺ってシャイで恋愛ベタな男じゃん！？」
と、言うと歩が笑って、
「恋愛ベタは分かるけど、シャイははどうかなぁ？？」
と、言った。
「シャイなの！！」
と、思いっきり歩にボールを投げた。すると歩が、
「いいじゃん。甘えて尽くしてもらっちゃえば！！男のプライド捨てて、女の子に流されるのも必要だよ。そう言えば話変わるけど、今年も流星のばあちゃんの所に行くでしょ？もし良かったら、百合とか、綾ちゃん達も一緒に行けたら楽しいだろうね。」
歩がそう言うと、俊がダッシュで歩に近付いてきて、
「それいい！！すっげぇ～楽しそう！！」
と、はしゃいでいると歩が、
「あっ！！でも、どっかにオオカミがいるからだめかもね。」
そう言って、歩が笑っていると俊が、
「お前オオカミって誰のことだぁ～～～～！！」
と、歩を追い掛け回していたのだった。

こんな風に流星達の夏休みは幕を開けたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1415a/

君が聞こえる～ハーモニー～

2010年11月10日10時46分発行